

顕浄土真実教行証文類序(一)

高田短期大学学長 栗原廣海

今回から『教行証文類』を拝読していききたいと思います。

最初は「序」です。親鸞聖人は右記のように「顕浄土真実教行証文類序」と題号を記しておられますので、本文に対して「まえがき」に当たる文は「序」と言うのが本来だと思えますが、一般には「総序」と呼ばれています。それは、「顕浄土真実信文類 三」にも「序」が書かれているために、「序」と言っただけではどちらの「序」であるかがわかりづらいということがあり、全体の「序」である冒頭の「序」を「総序」、「信文類」の「序」を「別序」と通称しているのです。しかし、本誌一一四号で、『顕浄土真実教行証文類』は『教行

証文類』または『教行証』と略称したいと述べましたように、私たちはなるべく聖人のご意向に沿った表記を心掛けるべきだと考えから、「総序」とはいわず、「序」と表記したいと思います。

尚、開山聖人七百五十回遠忌報恩大法会を記念して『真宗高田派聖典』が上梓されましたので、今後の引用は、可能な限りこの聖典を用いることにします。

さて、「序」には、浄土の真実の教えの真髓が、誠に格調高い文章で記されています。全体は三つの段落で構成されていると考えられます。第一段は、「ひそかにおもんみれば」から「疑いを除き証を獲しむる真理なり」とまで、第二段は「しかれば凡小修し易き真教」から「聞思して遅慮することなかれ」まで、第三段は「ここに愚禿積の親鸞」から最後の「獲るところを嘆ずるなり」までです。ただ、言うまでもないことですが、これは

聖人自身がそのように区切っておられるわけではないので、第一段は「大聖一代の教、この徳海にしくなし」までとする考え方もあれば、「まさしく逆謗闡提を恵まんと欲す」までを第一段とし、「ゆえに知んぬ、円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は疑いを除き証を獲しむる真理なり」とを第二段に入れる考え方もあるようですが、「序」全体の理解に違いが出てくるとも考えられませんが、『真宗高田派聖典』にも採用した、右記の区切り方に基づいて拝読したいと思います。

一、第一段

ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。

しかればすなわち、浄邦縁熟して調達・闇世をして、逆害を興ぜしむ。浄業機彰

わして、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまえり。これすなわち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲す。ゆえに知んぬ、円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は疑いを除き証を獲しむる真理なりと。

【現代語訳】

ひそかに思いをめぐらしてみると、思いはかることのできない広大な阿弥陀仏の本願は、渡り難い迷いの海を渡してくださいさる大きな船であり、何ものにもさまたげられないその光明は、煩惱の闇を破ってくださいさる智慧の日光である。

ここに、浄土の教えを説く機縁が熟し、提婆達多が阿闇世をそそのかして頻婆娑羅王を害させたのである。そして、浄土往生

の行を修める機がその姿をあらわして、釈尊は韋提希をお導きになつて阿弥陀仏の浄土を願わせたのである。これは、菩薩がたが飯のすがたをとつて、苦しみ悩むすべての人々を救おうとされたのであり、また釈尊が大悲の心から、五逆罪を犯すものや仏の教えを謗るものや、仏になる因を全くもたないものを救おうとお思いになつたのである。

この「序」は、いちばん最初に書かれたものではなく、『教行証文類』をほぼ完成なさつて、その全体を振り返り味わいながらお書きになつたものでしょう。ですから「序」は、『教行証文類』全体の要約でもあり、真宗の真髓を語つた珠玉のことに満ちているわけですが、その真髓をさらに端的に表現されたのが、美しい対句の、冒頭のこの一節であると言ふことができるでしょう。しかし、単に真宗の教えの端的な要約というだけで

とするけれども、煩惱の雲が覆つて見ることができない」と、迷いの心を断ち切れない苦悩の心境を語つておられます。

聖人の内室恵信尼のお手紙によりますと、聖人は六角堂に百日参籠され、九十五日目の暁、聖徳太子の夢告によつて、吉水で専修念仏の教えを説いておられた法然上人を訪ねられることになりました。そして「生死出づべき道」を語る法然上人のもとにまた百日通い、何があつても法然上人についていこうと決意を固められるのです。そのときの決定的なご自身のありようの転換を、『教行証文類』「化身土文類」に、「雑行を棄てて本願に帰す」と記しておられます。「雑行」とは「正行」に対するもので、自らの力をたのんで徳が積めるものと思ひ誤つて行ふ慢心、自力の行のことです。これを捨てることを宣言しておられるわけですが、それは、比叡山二十年間の行はすべて「雑

はないと思ひます。聖人が生死出離を求めて苦難の道を歩まれた末に法然上人との出遇いを果たされ、ついに到達された救いの境地が、実体験として歓喜の思ひで語られていると言へるのではないでしょうか。

聖人の足跡を簡単に振り返つてみたいと思ひます。承安三年（一一七三）、京都で日野有範の長男として誕生された聖人は、九歳で出家得度し、その後比叡山で二十年にわたつて勉強修行に励まれました。聖人はご自身のことはほとんど語つておられませんので、勉強修行の内容やその成果など詳しいことはわかりませんが、聖人の曾孫覚如上人の子である存覚上人は、その著『嘆徳文』のなかで、「定水を凝らすと雖も、識浪頻りに動き、心月を観ずと雖も妄雲なお覆う（心を静かな水面のように保とうとするけれども、波立ちが抑えられず、心に月のような明かりを見よう

行」であつたことの断定と、それ以後、一切の雑行から決別されたことを意味しています。そして、雑行から決別して帰入されることになつたのが、本願他力の念仏の道であつたのです。

帰入された「本願」が、「序」冒頭には「難思の弘誓」と語られます。弥陀の本願は人間の思議分別を超えたものであること、従つてことばに言い表すことのできないものであるが、そのはたらきが確実に「渡り難い迷いの海を渡してください大きな船」であると聖人が確信をもつて語られるのは、まさに聖人のこの体験に基づくものであると言わなければなりません。

では、大きな船である弥陀の本願が渡りがたい迷いの海を渡してくださいとどういうことか。それは本願成就の果位の徳としての「無碍の光明」、つまり何ものにもさまたげられない智慧の光が、生死に迷う凡夫にその迷いの実態を知らせ、

迷いを超えた世界を知らせてくださるといふこと
だと言われるのです。